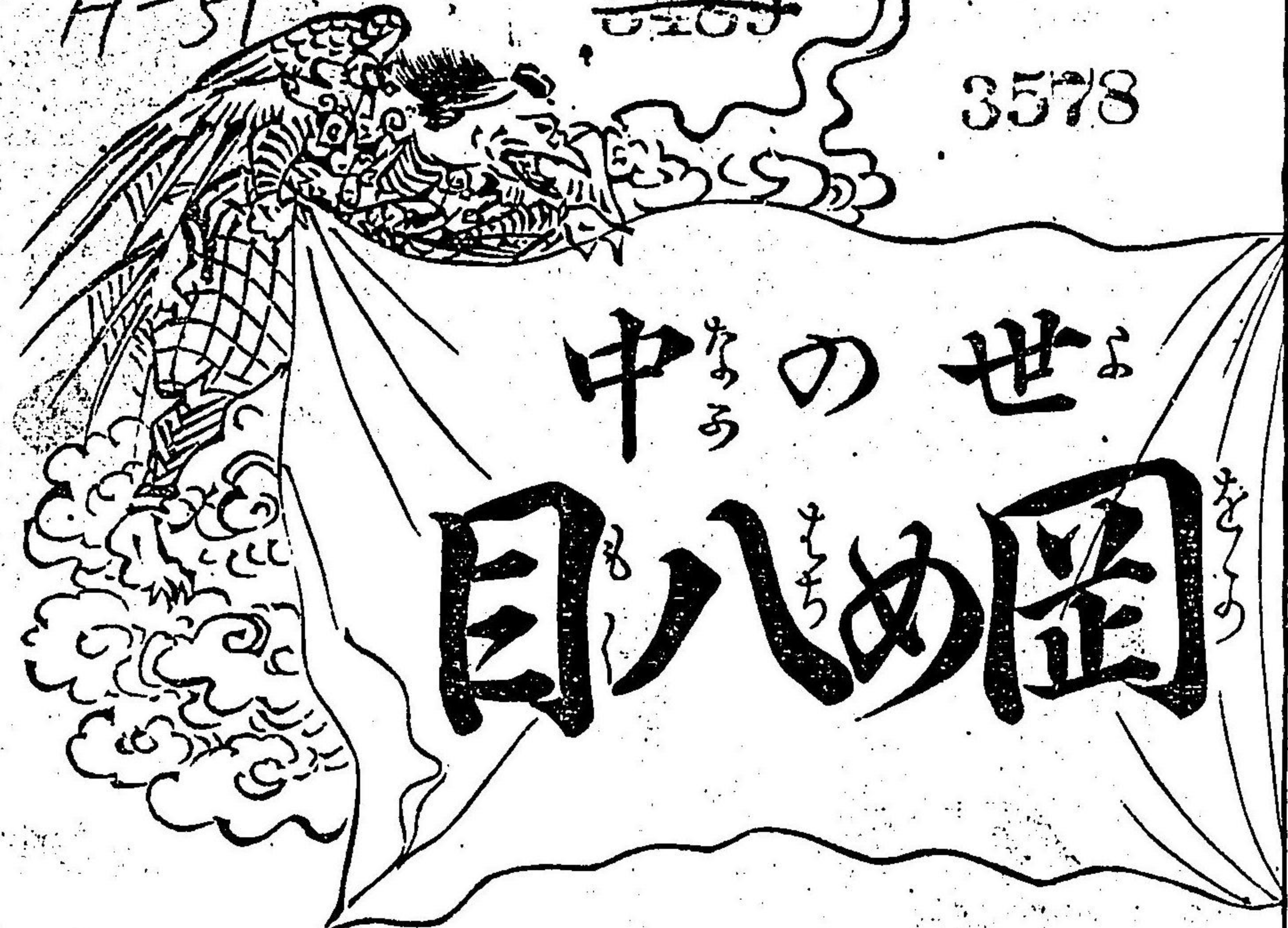


H-59

3578

3578



發兌 供泉堂



岡め八目れえしがさ  
 二人相對して其を圍みこれが手抜輪何れもありや否  
 やを見るえその圍む所の人よりろの傍らにありて見る  
 の能早ふして勝れるに如かず世の中のこと皆然らざる  
 はなきなり頃者友人芳南子岡め八目稿成る予把て之を  
 見るに寓言羅列讀者をして思はづ笑はしめ或は泣しめ  
 或は悲ましめ或え怒らしむるものありて尋常此戯作書  
 と同一視するものなきにあらざるべけれども個は是れ  
 月と監雲と泥程の見違ひなり此の岡め八目や世此中の  
 在るとあらゆることにて目又觸れ耳に聞きたる事と義  
 理も遠慮も何よも蚊も拂はず善いものえ善い悪いこと  
 と悪いと書下しされバ亦見る人のお爲めよもなり世に

○ 目録

○ 華族の目落

○ 書生の臍嚙

○ 裏店の金棒ひき

○ 失場の悪口

○ 著述編輯者の内幕

○ 乗合馬車のやべい

も聊か益する所なきにしもあらざるべし就て之印刷成  
り發賣の當日より皆さん各一冊づゝ購求して下されど  
茲にチヨピリ陳ること爾

明治十三年十月下浣

妙痴道士識

世の中 岡目八目

○華族の目落

世に人皆口を開けばヤレ國此蛆虫めイヤ國は喰潰だワ  
イ馬鹿だ痴漢だといふから何みさしてあんなわる口  
を云ふだらうと思ふたら華族さん此ことであり升るが  
儲この華族さん此ことをなんでもこんなにいふだらうと  
考ふるよア、判つゝぬるほど華族さんいなに一トツ  
國家のか爲めになるよなことをなせしこともなく唯  
だ壯大の家屋よ住み寒き風にもあたりしこともなく腹  
にひとじいことををもなさず婀娜たる別品を權でいなか

新潟 芳南散史 戯著  
東京 妙痴道士 閱

つた妾に置きても一婦ばかりは飽き足らず面も白から  
ずと今春や柳橋や芳町邊に猫狂ひ偶まには辻引や地獄  
も買ふてみ夫でも尙腹一杯イヤ違ッテ充分でないト召  
使此下女やおさんを懐妊させ漸次このことが世間を志  
れるようになるトそあで改定て二等親此印綬を負はせ  
或は金づくで内濟よしして少しも世間へ恥づる氣もなく  
平氣の平左衛門で居らるゝと何と笑ふべきみどではあ  
り升まいかイヤそれのみならず朝廷より最も厚き待遇  
を受て居りながら今日國家多事の時に當り女狂ひや無  
用の土木を起してつまらぬことよ金費し國の爲に何  
にか一ようとは少しも思はざるを何ぞ愛國れ心よ乏し  
きや

○書生は臍嚙  
富貴にして故郷に歸らずんば繡を衣て夜行行くが如志  
トは唐の親方が嘗つて云志捨言にして書生さんなどと  
亦能く腹臍せざるべからざるなり然るも父母の膝下を  
辭しく故郷を出る時にハ學成り志を遂ざれば舌を嚙ん  
で死ぬとも歸らず必らずや一人前れ人間と成り身には  
錦衣衣て再び父母に見ゆべきれみト口でえ立派に云  
ふて東京に出で來たけれどもドッコイそふはいかぬと  
みゑて學問どころか吉原でござれ根津であれ娼妓に誑  
されて現狀拔し毎夜の様に通いつめ未もと不義理れ借  
財や下宿屋の拂いも出來ぬ餘になれば僕は去る十六日  
に國親元白金を送れといふ手紙を出して置きたれば



多分近々先方から金がこようからドウカそれ内猶豫し  
 て呉の或はその内に拂ひをするから置いてくれと頭を提  
 げて腰を屈かめて漸くろれでその場がすむと又もこん  
 度え損料滯園を質置くやら或は朋友の書籍を借りて  
 来て脇へ賣りそれ金をもつて直ぐ吉原や根津に進撃を  
 試みるも如何せん囊中の乏しさが故又遂に妓樓の灯燈  
 部屋に拘留(否)違(ッ)打込るもあり又馬を連れて下宿  
 に歸るもあててその下宿にも居ることの出来ぬ場合よ  
 なれ之宿亭へ断(ッ)なしに逐轉(ッ)神田明神のお堂の下や  
 谷中の墓地に姑らく身を隠(ッ)極晴天にも顔をかくして  
 廣(ッ)大道も狭くあるき腹が減(ッ)は四五十文此焼芋(ッ)間  
 よ合(ッ)はするが又百五十文(ッ)牛飯(ッ)喰(ッ)ふて漸(ッ)くその日の

命を持ち因却苦惨親の元へも金を早く送れと再三郵便  
 税先拂れ手紙残出せとも親も呆れはて金残遣るとこ  
 ろか返事もろくくよこさなければ詮方なしに手長をど  
 うだか毒薬を飲んで自死するもあり桶屋や鍛冶やの弟  
 子になるも有りて始めて迷れ夢さめて日頃のことを後  
 悔し臍を噛むも既往の事は咎むべからず慎しむべし

○裏店此金棒引

九尺二間の一棟又人力車挽日雇稼糊賣婆に按摩針灸  
 療治所洗濯屋又賃仕事娘の臂の匂ひ(ドッコイ違ッス)光  
 りをもて左り團扇でその日を送る老婦あれば鼻の腕も  
 て宿六を喰せる女髪結あり或は金貸損料屋を種々さま  
 くの産業にうた世を渡る裏店社会その路次口は井戸

端よ長屋中のあらしをほじくり探して觸れ廻る鐵棒  
 引の隊長兼井戸端會議々長と呼る山的神たちが三人  
 四人と立寄れば必らず米が高くなつて困るとある家の野  
 呂間野郎は稼ぎたがらんで困るさか何處ぞこの娘はあ  
 の頃まで青ツ鼻汗をたらして居たが二三日前より眞白  
 に顔を塗立衣物もふだんの衣装と違ふやうだが何で  
 も旦那とりを初めたんだらうトカイふ間程なく淺草此  
 鐘がゴン、く、く、十一時を報すれば、ヤ、マ、ア、う、か、く、  
 か米も磨がすま喋つて居たよト呼この日の短いのは二  
 時間も三時間もつまらぬ話よ時を移し活計にあくせく  
 するのなんと愚の甚しきものさありませんか人間僅  
 の五十年そのむだ話に費したる飯令二三時間よても



再び得返しのなるべきものゝほらす且つ人間ハ貧乏し  
 ようと富貴を極めようとするも勉むると然らざるとに  
 あれば裏店れ山の神だちのよく慎むへきあどよる  
 否山の神のみならずお天バ娘達にも鳥渡お告げ申升  
 ○矢場女の悪口  
 ナヨイト旦那チヤダンゴデハナカツタコレハ失敬三チ  
 ヤンチヨイトく一服お上んなハイヨそつちれ方の悪い  
 人寄つて入らつしやいよアい、じやありませんかお歸  
 りに屹度ですよ待て居ますよと脊中を叩けば男ハ二人  
 連れよて行きぬがら「あいつのよつぽとおれ又氣があ  
 るよちげい子イその証據にやれれの手を今あつそり握り  
 やがつた熊馬鹿ぬがまやがれあれはおれに早晩から氣

がゐるんだけれども手前がゐるからちよいと外まやが  
つたんだ三べらんめへ手前の様な木偶助も誰れや惣れ  
るものがあるものか余り鼻毛の長ひようなことをいふ  
なト時に向ふより巡査が廻つて来て巡コリヤく規則を  
何んど心得るか往來て大聲を發してそんなことを爲る  
ナンチャクト云はれて三公熊の二人のハイどぶぞ五免  
下ださいましたといふてそ此場の過ぎ去りたり  
それ矢場の家たる間口極く狭く奥行殊どに長し外又障  
子を鎖して奥の的を列らね二三間を隔て、その前に矢  
臺を横にならべ脇に火鉢を置いてそばに茶道具を備ふ別  
品の傍らにあつて巧に客を釣らんとえて入らまやいと云ふて  
お上んではいと呼びかけ客上れば入らまやいと云ふて

煎花を呈しついで又長煙管よ煙草を附で飲ましめ早  
く客の懐に金があるのなにか馬鹿の利口のトを言つて  
見る時に客の衣ものか新らしいの又少少馬鹿らしいと  
見てとれば頻り又笑媚を云だし旨く持なにかはられて  
客とうれまさまみかたなく弓張ひいても的の當らす  
只ドンチャントねらい張付てもねらいも付す火鉢のそ  
ばに寄つて客花ちゃん今晩モウ店を仕舞ふて待合えで  
も往うトやないか女「ハイ未だ早ふござんすあらモウ少  
し後ましましようヤマア何んぞ面白い咄でも仕ようト  
やありませんのト煙草張付て吹かしめ客花ちゃん何ぞ  
近頃めづらしい咄は聞んか女「ハイアリ升トモく澤山  
ありますその中よ面白いが咄のこれ頃淺草の芳



南散史トいゑる人が編輯せる世の中岡め八目ちゆう書を  
 を一冊近所の書林で買ふて来て見ますとそれ書えよく  
 世間のこと淑悪く云ふたりほめた所ろもありてよくこ  
 まるにほもしろく書ひてあり升よシテ聞けばあの書を  
 編輯した人の世の中此穴ばかり探り出してそれを種  
 としてこふゆう書をこしらひそして大そうなお金を取  
 るそふですから見たいたいなんどはウツカリ待合なんどに  
 いくことはなりまへんそふでなくともハヤその書の中  
 に矢場女の悪口の出でありますよトいふ所へテンプラ  
 喰いタイくく女「チオイトく人れそしりも世の  
 ざりも思ひぬ戀のみつせ川逢ぬその日は氣よかゝるチ  
 ヤンくチャチヤン女「チオイトお聞なさいよマアお前はんと私

の身の上の様をありませんかトいふ所へ心易戀れ辻占  
 ひト女「チャ旦那お買なはいよ辻占さんチオイトお呉ん  
 なはいよト呼込み三四錢程のお呉れ今旦那の心易を出  
 せ升よト「見たしお依頼はぬーひとり秋厘外意はさらに  
 なひトマアこれごらんなさいよト時に夜半の鐘がゴン  
 くと鳴るよ驚き客は又後日を約して家よぞ立歸る様那  
 人はなかく稀にて薬にしたくもケ様な人え世になきな  
 り

予は一トつそこで矢場此狐るはなひ娘さんに告ぐるこ  
 とがあり升るその告ぐるおと、は外ではありませんが  
 娘さんなどはつまらぬ矢場那どに居て店先きに顔あま  
 りよい顔でもないからよいかもえらんがをさらじ何一

下つろくな事を覺へず小供等まで馬鹿にしられても  
 平氣でお出なさるゝのは抑もなんと云ふ腸の腐つた馬  
 鹿あま(チツトコレバ失敬)娘さん達でありま升か早くこ  
 んなことを止めにして確真ありした業をなさいませ  
 ○著述編輯人の内幕  
 近年は著述編輯人れ多いことく何んともかとも咄し  
 に成らぬ程あるが皆それく堂々文壇よ上り筆を執り  
 硯を弄したれころは天下れ耳目だ社會れ先進者だぞル  
 一ツ一なんどの糞でも喰いミルなんぞは屁でも嗅げと  
 云ぬぬ斗の風体なれども能々その内幕を探りて見ると  
 イヤイヤ云ふにいそれぬ人のみ多くあつて妻を持ち妾  
 を置き子供在り下僕有り下女あり本宅を構ひ多少の不



動産を有して人よは先生々々と呼ばるゝ位の人を僅も  
田島。總生。川井景一。萩原。三宅虎太。の數氏に過ぎず餘の皆  
店借下宿して縦の机もランプ一臺四硯も筆二三本汚穢  
かゝつた坐蒲團一枚を所有品として夜は損料蒲團を着  
てゐるは餅なりに寐ね晝は一ぜんめ一八拾文の看板  
のかゝつてある家よ行ききて并免し三四杯喰ふて腹を飽  
かしむるあり或の百二三十の焼芋を喰ふて飯に代るも  
あり蓋一昨年頃までの下宿料の安いが故よ此くのあら  
ざりしよ今年の春ごろより諸物價高直になりたるを以  
て一ヶ月三四圓の下宿料に代るお八十文のめしや百か  
ろこらの焼芋を喰ふて下宿に月三四十錢の座敷料  
を拂ひ辛らく今日の露命を繋ぐ所のもの(イヤ違ツタ)先

生なり而して其著述編輯せしもの如何なことが書ひ  
てあるかと思れば條約改正國會論經濟論法律マヤレ民  
權ダト口癖或の流行もれ(それ)に違ひ(あ)よう人  
して思はしむるも苟くも目のあいた知識のある人より  
これらの先生を見るときの時好を競ひ僅の草稿料に汲  
ふとし國會を開くにこれが持論にあらざるも時が時な  
り見る人のお受はよし止むを得ずヤレ民權はならなけ  
りやならんイヤ國會液開かなけりや我日本の國の治ま  
りて立行んと眞面目らしく書き立てるも手よだお把らず  
何にあの判下書めが小しやくな何にあの筆耕師めがな  
よ汲放言しやがるんだといふはしむるよ至る宜否五尤  
なるかな皆さんが何屋で編輯出版する本のおも黒いくと

かつまやるやいつぞや予ある書林に行て店よいろくの  
 本をひやかして居たる所へ某先生やつて来て懐より草  
 稿を出しこの家の主人又遇ひ草稿を買てくれんかいと  
 云ふ主人これを見て曰くこの草稿のあまり紙敷がなく  
 てこんなもれを版し起しての割と合とぬとて断るに  
 も拘えず辭するも聞入れず頭まで提げ腰を屈がめて  
 草稿を買ふてくれといふさまの恰も鰯が鯨のお鬚を拂  
 ふがごとく實に見にくい体てありき蓋し當時は著述  
 編輯人のみなこんなものだといふにあらざれども數  
 百人の多き間にいとところ三分の二位は大ぢやうぶこ  
 んな先生がありろふでげす果してそふならば吾くの腹  
 を抱へて大笑を志なければなりませんすまい時又予がこの

本の志た書きをして居る所へ東隣りの小僧が駈來りて  
 曰く先生何にか笑ふ先生もやつぱり草稿を賣りては  
 米に代へて喰ひ喰つて又編輯して漸く今日の命を全  
 ふしおる所の人にあらずや然らば何よもそれほど他の  
 著述編輯人を笑ふあとのあり升まいと予曰く他の人を  
 笑ふよあらず又羨むにあらず唯だ名利に奔り過ぎると  
 餘り品行のよろしからざるとを笑ふのみと小僧ンそん  
 ならよいと退ぞき去つて行くころ淺草寺の晚鐘がゴ  
 ンくと七時を報ず因てこの著述編輯人の悪口ばなしの  
 先づこゝで書き止めトいたし升

○馬車此やべい

車がらく馬ヒンくサア新橋々々旦那鐵道まで乗つて入

らつ志やい淺草見附まで天保二枚いかゞでせと虱れを  
 りそふな外套を着る小僧や肩を裾よ結んだ破れさも  
 のを着る別當らが無暗矢鱈に往來人の袖にすがり袂に  
 手をかけて自分の馬車に乗せあまうとするを又一人の  
 小僧か来てその旦那かいらの客だ何んぞつれていく  
 んだイヤかいらぶ客だ手前らにとられてたまるもの  
 べらんめいと喃々呶々茲よ於て馬の尻毛を引扱ておれ  
 を二本になして鬮を引きトウくあとあら来た小僧に長  
 くじをとられてそれ客を乗せそあなふと今度は馭者ど  
 うしで大喧嘩炭とじめだし或は八人乗の馬車に極天氣  
 のよき日よまわり之母衣を掛け巡査此目に付ぬ様おし  
 て拾二三人も乗せあけ何に喰いぬ顔よて淺草橋邊まで

行くとすぐ巡査も見あらせられて叱られるも少しも懲  
 り性なきにや又横山町通りの邊へ行くと後とを見先さ  
 を見八人乗て居るその中へ藥研堀の方より来る人を捕  
 つかまて乗せ込まふとする所は又巡査の後とより来る  
 と馭者めがやべいくと呼ぶ聲き、付別當ハ驚吃して馬  
 車の内へ駈込みあのお廻りやいらい出世が早いな此の  
 間あいらを此の先きでいとめやがつたおまはりなあれ  
 だぜ別當「サア往ウくハア危ぶナイくソレ親方ドケイソレ  
 婆さんそつちへよけろうハイくキユツク

東西くこれ岡め八目なるもの何んでも世の中にあ  
 らを探り出して編者の知識のある限り筆の命毛の續  
 くだけ引書まのす積りで五座い舛から何卒私どもれ

米櫃こめびつを肥こす氣きでお買かひなされて五ご評判ひやうばんの程ほど偏へんよ願ねがひ上あ奉たてまつり舛まちその為ためめ口上くちやうさらく左ひだり様さま

川井景一著

○淺草新繁昌記

右不日出版

完壹冊

小池洋次郎著

○明治操觚者小傳

肖像入

完壹冊

世ニ操觚者在リテ亦金玉ノ書冊多シ世人其書冊ヲ讀  
テ而シテ其著者ノ言行如何ヲ知ラズシテ夫レ可ナラ  
シヤ該書ハ福澤沼間三宅中村川井成島等其他數先生  
ノ小傳ヲ網羅シタルハ亦以テ其人ノ言行ヲ知り或ハ  
修身ノ津梁トナルヘキノ珍書ナリ請フ不日出版ノ上  
ハ最寄書林ニ就テ講讀セラレシイナ

H-19

明治十三年十月廿二日御届 定價金七錢

賣 弘 所

銀座四丁目  
淺草並木町  
同大田子町  
神田大坂町  
元大坂町  
神田表神保町  
琴平町  
下谷仲町  
同草瓦町  
淺草馬町  
大傳馬町  
通一丁目  
和泉町  
露月町

發兌元

編輯者

出版人

新潟縣士族

川村

淺草區象瀨町二番地

東京府平民

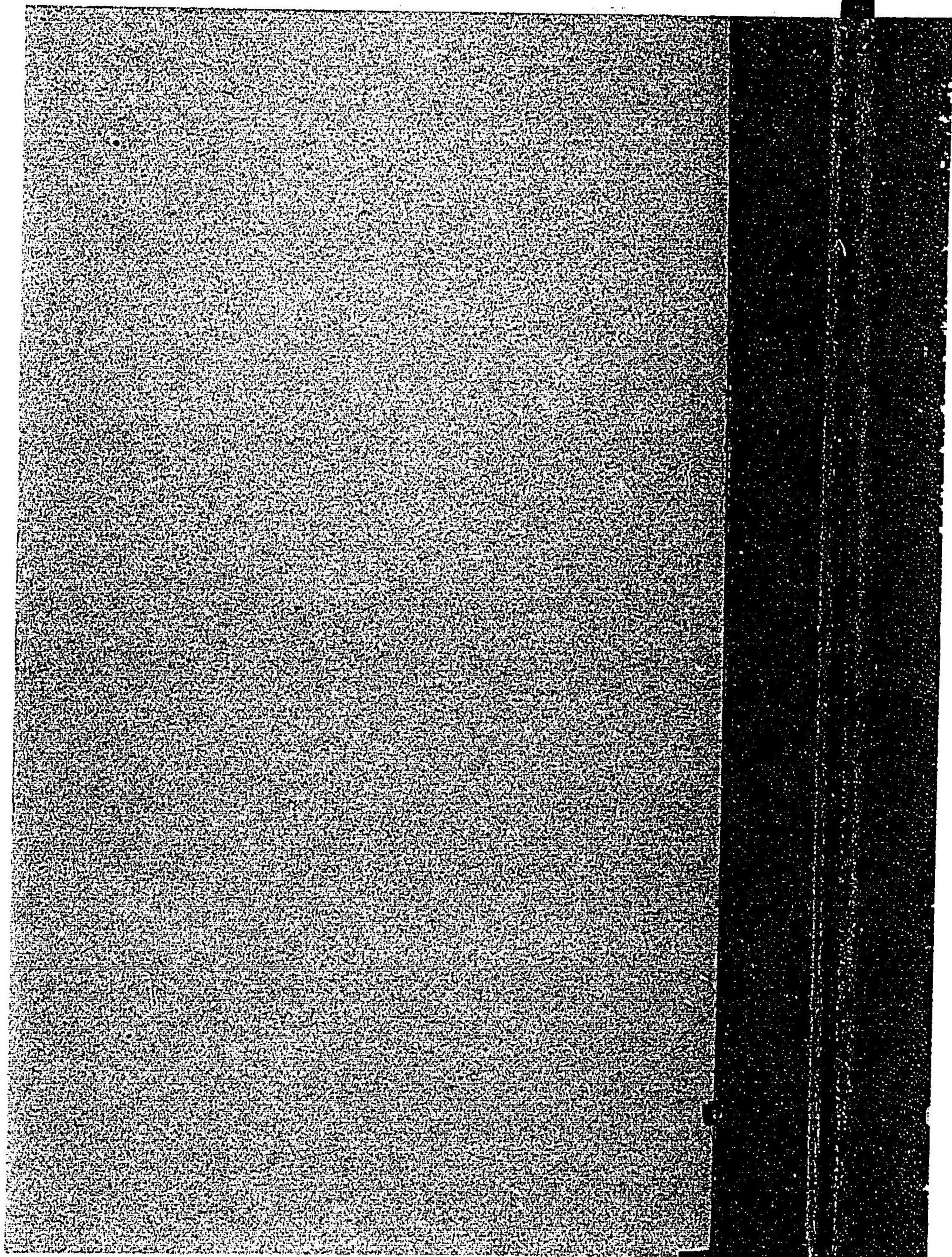
原田

淺草區南元町廿番地

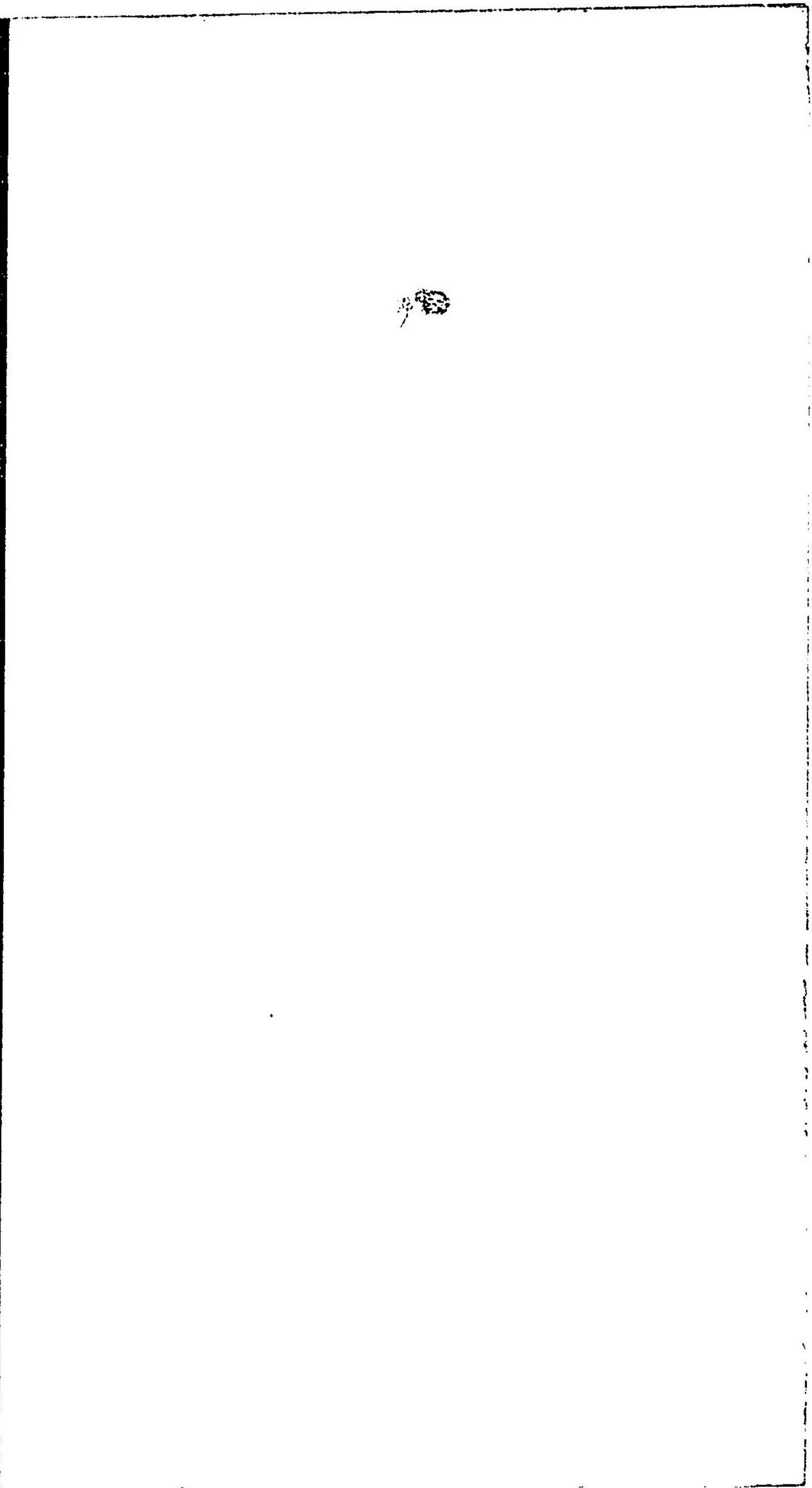
供

泉堂

山 中 北  
み 浦 屋 郎  
三 々 堂 木 堂 屋  
巖 進 堂 法  
漸 山 堂 木 堂 屋  
秩 霞 堂 木 堂 屋  
靜 見 勢 利 堂 木 堂 屋  
伊 島 見 勢 利 堂 木 堂 屋  
伏 島 見 勢 利 堂 木 堂 屋  
綱 島 見 勢 利 堂 木 堂 屋  
伊 島 見 勢 利 堂 木 堂 屋  
い 島 見 勢 利 堂 木 堂 屋  
平 島 見 勢 利 堂 木 堂 屋  
上 田 屋 榮 三 郎







10

10

世の中 岡目八目

川村忠國

国立国会図書館

091593-000-2

特49-527

岡目八目

芳南散史 / 著

M13

DBO-0037



先

